

新聞を生かした読書の日常化をめざして

姫路市立林田小学校 教頭 内海 行之

1. はじめに

本校は教育目標、評価項目等を以下のとおり掲げ、NIE活動に取り組んでいる。

■教育目標

「いのち輝く林田っ子—豊かな心・学びの心・挑戦する心の育成」

■重点目標の一つ

「いのち輝く林田っ子・自立した学習者の育成」

■評価項目

「授業改善や俳句づくり、新聞読書等を通して言語活動の充実を図る」

■評価指標

「6割を超える児童が上記の言語活動を好む」

児童数 170 名弱、学級数 7（特別支援学級を含む）という小規模校の利点を生かし、全校挙げての実践である。

本稿では、2年・4年・6年の実践と全校の取組を紹介する。

2. 実践・取組内容

(1) 2年生

最近では社会全体の IT 化がすすむ中で、新聞を取っていない家庭も珍しくない。そのような家庭の児童にしてみれば、学校で手にする新聞こそが彼らにとって唯一新聞といえる。そこで、新聞社に依頼し、一人に一部「子ども新聞」が当たるようにした。そして「新聞に親しもう」をテーマに朝の読書タイムに

一斉に新聞を見る・読む活動を行った。どのページを開いているか、何の記事を見ている、読んでいるか、それは児童の興味・関心に基づき、まちまちであったが、新聞自身が持っている魅力・おもしろさに触れることのできた 10 分間であった。

また、知っている漢字に○を付ける活動も行った。「ぼくは・わたしは、これだけの漢字を知っていますよ。」と得意げに○の数を発表する姿が印象深かった。

他には、4コマ漫画を楽しむ活動も行った。

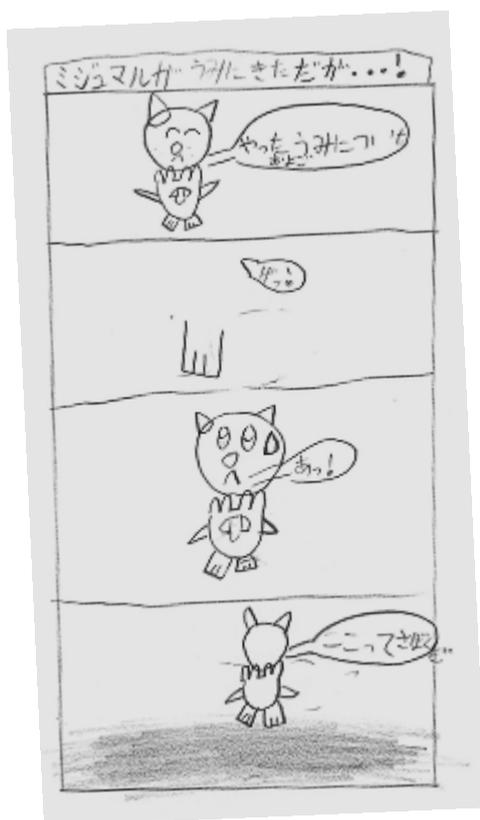


漫画を楽しむといっても、簡単なことでは

ない。この漫画のおもしろさはどこにあるかを考え、みんなに分かるように発表することは、思考力・表現力を身に付けさせるうえで有意義な時間であったと考える。

さらに、4コマ漫画の自作活動も行った。

(作：U児)



この作品は、やっとうみに着いたと思ったら、海は海でも砂の海、砂漠であったという落ちのついた作品である。U児は口数少なく、自由選題の生活作文では題材を決める時点で固まってしまい、なかなか記述に進めない傾向にあったが、本活動を重ねていく中で表現力を身に付けていった。

一般的に児童は4コマ漫画を描く活動を好むものである。しかし、すべての児童が4コマの体（起承転結）をなした作品に仕上げられるかといえば、そうではない。高いハードルがある。上記の4コマのおもしろさを読み解く学習が4コマの体（起承転結）を無意

識のうちに理解させ、U児の表現へとつながっていったと考える。

(2)4年生

国語の時間に「新聞を読もう—新聞を学ぶ、新聞から学ぶ」をテーマに、各自の選んだ新聞記事について、次の3つの視点から自己の考えを書く活動を行った。

- ①記事の内容から分かったこと、考えたこと、思ったことなどを書く
- ②記事の書き方について、うまい、まねをしたい、と思うことを書く
- ③新聞の読み方や書き方について学んだことを書く

I児は12月3日付の神戸新聞25面「天井Vの字迫る炎」を切り取り、

①について

28歳の女性は助かった。食品会社のエンジンのかかったままのトラックに乗っていた男性は死亡したそうです。37歳の女性は負傷です。9月の定期点検はいじょうはなかったそうです。なぜこんな大事件がおこったのか、わたしは分かりません。ですが新聞を見ると、ささえていた金具が弱まっていた可能性がでてきたのです。わたしはびっくりしました。～後略～

②について

写真やイラストは多すぎず少なすぎず文とよく合っているところがうまいなあと思いました。題から今にも炎が飛び出しそうで題名もよく考えているんだなあと思いました。

と書いた。

Y児は朝日小学生新聞5面「わたしたち絶滅してしまったようです」を切り取り、

①について

1979年8月に四国地方の高知県で目撃されたのを最後に一度も見つかっていないニホンカワウソが絶滅になって、どんどん動物がいなくなって悲しくなりました。～中略～たくさんの絶滅した動物がいるということが分かりました。「絶滅」と言われても本当に見つかったら、すごくニュースで放送されると思います。

②について

最初にびっくりしたこと、あらたにわかったことを書いてあったので「なぜ？」ということで、先が読みたくなるようになる。

と書いた。

この学習活動は、新聞づくりにとって必要な知識・技能を身に付けさせ、11月の単元「取材したことをもとに学級新聞を作ろうーみんなで作ろう」への活動意欲につなげることができた。

「新聞のことは新聞から直に学べ、習うより慣れろ」である。

(3)6年生

NIE事務局から二度にわたって講師派遣をしていただき、新聞の構成、記事の書き方等について直に学んだ。

ここでは、栗川喜典・産経新聞社姫路支局長を2回目の講師に招いた時の授業内容について紹介する。

◆ねらい

- ・体験活動を分かりやすい新聞記事にまとめるために必要な知識・技能を身に付ける。
- ・知識・技能を活用し、新聞記事を書くための表現力を身に付ける。

◆指導計画

| 時 | 学習活動 | 指導上の留意点 |
|---|------|---------|
|---|------|---------|

| | | |
|-----|---|--|
| 一日 | <p>○姫路防災センターと姫路市平和資料館を見学する。</p> <p>○記事を書くために取材し、情報を集める。</p> | <p>●事前に自分の聞きたいことや見たいものを明確にし、見学に臨ませる。</p> <p>●自身が興味・関心を抱いたことや人に伝えたいと思ったことをメモに記しておくよう指示する。</p> |
| 一時間 | <p>○新聞の特徴や構成を知る。</p> <p>・どのような見出しやリードがあるか</p> <p>・読者をひきつける工夫は何か</p> | <p>●見出しとリードや本文との関係のほか、見出しや本文の書き方、文字の大きさや飾りについて説明する。</p> |
| 二時間 | <p>○伝えたいことが分かるように5W1Hに気を付けて記事を書く。</p> <p>○できた記事をグループや全体で読み合う。</p> | <p>●実際の記事を使って、5W1Hの記述の仕方を直に学ばせる。</p> <p>●まず「結論」を端的に書き、続いて全体の内容が分かるように「概要」を書き、さらに関連する内容を「補足」として付け加えるよう説明する。</p> <p>●必要な要素を落としきっていないか見直しをさせ、必要に応じ修正の助言をする。</p> |

第一線で活躍している記者の話には説得力がある。児童は講師の助言を熱心に聞き取り、5W1Hの記事に仕上げた。

(4)新聞コーナーの設置

次の2点を主な活動とし、図書室近くの渡り廊下に読書コーナーを設置した。

- ・各社1面のトップ記事を比べる。
- ・各社の同じ事件、事故のニュース報道の見出しを比べる。

この取組は、全児童にとって新聞を身近な読み物に感じさせることができた。新聞を取っていない家庭の児童にはことさらに意味があった。また、高学年にとっては、複数の新聞記事を読み比べ、書き手の意図によって記事の内容や写真が変わることを理解させるのに有効であった。

(5)新聞感想文コンクールへの応募

2年前から全校で取り組み、応募している。全校で応募といっても、全児童個々に新聞記事を選ばせ、感想文を書かせることは容易ではない。教師の手厚い支援が必要である。

そのため、各教師は自ら記事を選ぶことが難しい児童のために、あらかじめ記事の切り抜きをしておき、上記の児童に提示できるようにした。また、家庭での協力が得られるよう取組の趣旨を文書で周知するなどの工夫をした。

結果として、学校賞と摺河学園賞（5年S児）を受賞した。



(記事を選ぶ3年児童)

3. まとめ

学校自己評価の参考資料とする児童アンケート「新聞を去年と比べてよく読むようになりましたか」の問いに対して、次の結果であった。

| | はい | まあ | あまり | いいえ |
|----|----|----|-----|-----|
| 人数 | 57 | 44 | 38 | 28 |
| % | 34 | 26 | 23 | 17 |

同じく「俳句づくりをしながら、言葉をたくさん覚えることができますか」に対しては、次の結果であった。

| | はい | まあ | あまり | いいえ |
|----|----|----|-----|-----|
| 人数 | 66 | 66 | 29 | 12 |
| % | 38 | 38 | 17 | 7 |

また保護者アンケート「わが子は本（1～6年）や新聞（5，6年）をすすんで読んでいるか」に対しては、次の結果であった。

| | 思う | だいたい | あまり | 思わない | 分からない |
|----|----|------|-----|------|-------|
| 人数 | 21 | 53 | 67 | 17 | 2 |
| % | 13 | 33 | 42 | 11 | 1 |

これらの数値を見るからには、おおむね評価指標「6割を超える児童が俳句づくり、新聞閲読等の言語活動を好む」を満足していると考えられるが、家庭での言語活動とくに読書活動にまだまだ課題があると言わざるを得ない。

ネット上で動画が氾濫している今、読書の日常化の定着には家庭の協力が欠かせない。また、小学校での6年間だけの取組では不十分である。家庭に配布している林田中校区版「学びのすすめ」をテコにし、読書の日常化を今後も図っていきたい。